腰椎すべりを伴う腰部脊柱管狭窄症術前(左)と術後8年時(右)の脊髄造影後CT像：点線矢印の方向に内視鏡で侵入し後方除圧し、白矢印の先にある椎間関節は侵入側でほぼ温存され、対側は全て温存されたため、術後に不安定性が起こりにくく、固定術をしないでも良好な成績でした。